

バルザックにおける動物表現

——『谷間の百合』と『ゴリオ爺さん』における鳥の表現——

沖久 真鈴

はじめに

19世紀前半はパリが大きく変化した時代である。さまざまな政治変動があり、さまざまな地方からさまざまな階級が集まったことでパリは巨大化した。人の出自や金の出所は曖昧になり、方言が通常の会話すら邪魔をした。そのフラストレーションを解消するために人々が求めたものは、人の外見の特徴から内面を知ろうとする学問に裏付けられたガイドであった。ガルの骨相学⁽¹⁾やラファーターの人相学⁽²⁾が流行し、さらに「生理学」と称して人々の生活や風習を分析する読み物が生まれた。この流れの中で重要な役割を果たすのが動物のメタファーである。人間のあらゆる身分や職業や内面をコード化するのに動物のメタファーが用いられた。

バルザックもこうした流れに影響を受けている。後に「人間喜劇総序」のなかで「人間喜劇の構想は人間界と動物界との比較から出てきた」⁽³⁾ものであると明かしておりまたこの総序の中で「ビュフォンが一冊の本によって動物学のすべてを書きあらわし、あんなにも立派な著作を残した以上、「社会」についても同じ種類の著作が行われるべきではなかったか」⁽⁴⁾と言及し、博物学者ビュフォンの『博物誌』(1749年)⁽⁵⁾に影響を受けたことがうかがえる。バルザックが動物に寄せる関心には目を見張るものがある。1833年に『ヨーロッパ文芸』に四回にわたって掲載した『歩き方の理論』という生理学ものを見てみよう。これは人の歩行の仕方から、その人物の内面を知ろうとする分析であるが、いざ人々を観察してみたところ、バルザックはいかに人間の動きが不自然でぎこちないかということに気がつき、それに対して動物の動きがいかに無駄

がなく美しいか、と思ひ知る。そして人間を知るためには、「動物の運動」を深く研究しなければならない、という結論に至っている。

では、動物の運動を深く研究して、具体的にバルザックはどのように動物を小説に取り入れたのか。『歩き方の理論』⁶⁾が掲載された翌年 1834 年に完成され 1835 年 3 月に出版された『ゴリオ爺さん』と同年 11 月に「パリ論評」に掲載が始まった『谷間の百合』の二作品における動物の比喩に着目すべきだろう。〈人物再登場法〉を思いつき、いよいよ人間喜劇として脂がのりだした頃の、そして動物への強い関心を世間に示した後のこの二作品にはどのような形で動物の比喩が使われているだろうか。今回は二作品に共通して多く見られる oiseau「鳥」の比喩に絞り、物語を分析してみよう。バルザックが読み影響を受けたであろうビュフォンの『博物誌』のなかで、鳥には多くのページが割かれている。ビュフォンは人間と四足動物と鳥を比較し、四足動物にはない、あるいはそれよりも優れている鳥の特性として「視力」と「聴力」、そして「移動」の観念を挙げている。遠くからでも獲物を見つける鋭い眼と、耳にした音や言葉をすぐさま真似て発することができる卓越した聴力を持ち、常に大地に足を付け生まれた土地から遠くに移動することが少ない四足動物に比べ、高いところへ上昇することも長距離の移動もできる空間的な自由を持つ動物、それが鳥であるという^(補1)。その鳥たちは、バルザックの小説の中でどう動くのか。何らかの役割を負っているのか。今回は『博物誌』におけるビュフォンの鳥についての考察と、個々の鳥の生物学的な習性や特徴を踏まえながらテキストを分析し、鳥の比喩表現から新たな読み方を提示しようとする。

1. 『谷間の百合』における鳥の比喩表現について

1835 年に「パリ論評」に掲載が始まったこの作品はたった二通から成る書簡体小説である。物語は、1827 年の時点で、1814 年から 1820 年までの王政復古に移った時期を回想し物語の形になっている。主人公フェリックス・ドヴァンドネスが愛人ナタリー・ド・マネルヴィル伯爵夫人に過去の恋愛を話すよう懇願され、彼女に宛てて出した一通の手紙が全体の 99 パーセントを占め、残りの 1 パーセントがそれに対するナタリーの返信という構成になっている。

母親の愛に飢えた青年フェリックスが初めて出席した舞踏会で美しい人妻モルソーフ夫人に出会い、思わずその白い肩に接吻してしまう。夫人は驚き立ち去るが、フェリックスは彼女を忘れられずモルソーフ伯爵のクロシュゲールドの館を訪ねる。モルソーフ伯爵は、気に入らないことがあるとすぐに夫人に感情をあらわにして暴言を吐き夫人の心を傷つけていた。それに加え子供が病弱なことにも苦しんでいた彼女は自分を慕ってくれるフェリックスに心を許していく。しかし妻として母として、フェリックスの求愛は拒み続ける。そのかわり、自分を母親のように愛して欲しいと頼み、夫人もフェリックスがパリの社交界で成功するよう手ほどきをする。そのおかげでフェリックスはパリで出世を果たすが、官能的なイギリス人ダッドレイ夫人の誘惑に負ける。それを知ったモルソーフ夫人は嫉妬のため病に倒れフェリックスが駆けつけた時には危篤状態であった。そこではじめてモルソーフ夫人は一人の女性として愛に身を任せたかったと告白し、しかし最後には欲望に屈しなかった崇高さを誇りに、死んでゆく。この話をナタリーに手紙で送ったところ、モルソーフ夫人の亡霊と戦う気にはなれません、と別れを告げられる。

さて、この小説の特徴は、他の小説に比べて不思議なほど鳥の比喩表現が多いことである。なぜだろうか。物語の展開と関係があるのだろうか。それとも、語り手が登場人物の醸す雰囲気や行動のありようを読者に共有させるための小説技法なのだろうか。では、物語の中で登場人物たちに対してどのように鳥が使われているか、人物ごとにリストアップし分析してみよう。⁽⁷⁾

幼少期を寄宿舎で過ごし母に疎まれ育った、貴族の青年の主人公フェリックスの場合はどのような鳥の比喩表現が使われているのだろうか。

1) フェリックスが、苦手な母親と偶然晩餐会で出会った場面では――

母が馱馬車でやってきたのです！私は母の眼に射すくめられて、蛇に見こまれた鳥のようにじっとしていました。(p.979, 1.38)

馱馬車に乗ってうねうねと *serpenter* 「蛇行」してやってくる母親を蛇に例え、それに対して固まってしまう無力さを鳥に例えている。まるで、遠くから獲物

を観察していて一気におそいかかる蛇と不意をつかれて事態が理解できず恐怖に怯える鳥だ。読者もまた、蛇に睨まれると鳥になり、予想外の恐怖に一気に取り込まれる。

2) モルソーフ夫人がフェリックスに出世の心得を語る場面では――

彼女は私にしんみりした声で言いました。「あなたのお顔立ちと目つきを拝見すればいつか必ず高いところに住む鳥たちの一羽になるだろうということは誰だってわかりますわ。」(p.1041, 1.4)

出世し社会的に高い位置に成り上がることを、高いところに住む鳥のイメージに例えている。読者は、まるで気高く観察眼にたけた立ち居振る舞いをする猛禽類（鷹、鷲、はやぶさ等）に同化し、周囲の気分から一気に突き抜けるイメージの中に気化する。

3) ある晩モルソーフ伯爵が発病し重体となったとき、フェリックスが医者を呼びに出かけた場面では――

私は早速ひどい天気の中をアゼーまで駆けつけ、外科医のデランド氏をたたき起こして、鳥の素早さで、引っ張ってきました。(p.1126, 1.31)

長距離を短時間で移動できる鳥に例えられ、「全速力」のイメージを読者に共有させている。

4) モルソーフ夫人のおかげでパリで出世し国王から直々に書記官を務めるよう仰せつかったフェリックスが成長した自分を見てもらおうとモルソーフ夫人のもとへ会いに帰る場面では――

私は燕のようにトゥーレーヌへ飛んでいきました。(p.1110, 1.23)

フェリックスのはやる気持ちや大急ぎな様子が、鳥の中でもとりわけ飛行速度の速い *hirondelle* 「燕」により例えられている。読者は、ひじょうに小さくどのような障害をすり抜けても用事をたし、また以前に巣をかけた家に戻ってくる忠実さを持つ燕に同化する。

5) ダッドレイ夫人との情事がモルソーフ夫人に知られ、慌てて馬でモルソーフ夫人のもとへ駆けつけた場面では――

彼女は無人荒野をかける燕にも似たすさまじい突進の響きを聞きつけ、私が高台の角でさっとその前に姿を現すと、私に向かってこう言いました。「まあ、あなたですの！」(p.1149, 1.34)

同じく *hirondelle* 「燕」による速さと忠実さの例えである。

物語の大部分の語り手はフェリックスであるので、フェリックスが自らを鳥に例えているということになるが、回数は計 5 回、内訳 3 回が *oiseau* 「鳥」、2 回が *hirondelle* 「燕」である。牙を持つ蛇のような危険性がない鳥の無害で無力なイメージや、高いところに住む一般的なイメージが使われ、燕は、素早さと忠実さの代表として使われている。

トゥーレーヌの貴族でありクロシュグールドの館の女主人モルソーフ夫人にはどのような鳥の比喩表現が使われているのだろうか。

1) アングレーム公歓迎の舞踏会で初めてフェリックスがモルソーフ夫人に出会う場面では――

一人の婦人が私の貧相な身体つきを見違えて、どこかの子供が母親の楽しみを待ちくたびれて眠りかけているものとても思ったらしく、まるで鳥が巣に舞い降りるような身のこなしで、ふわりと私のそばへ腰をおろしました。(p.984 1.9)

モルソーフ夫人の軽やかな身のこなしが鳥に例えられている。また貧相で子供のように見えるフェリックスに対して母鳥のイメージであり、のちにフェリックスに処世術を教えたり、プラトニックな愛しか許さない関係性も出会いの場面ですでに鳥によって暗示されている。読者は、小鳥に餌をやり自然に当然のごとく巣に戻る母鳥の無限愛の振る舞いに包まれる。

2) モルソーフ夫人の声の描写では――

彼女のイという語尾の言い方は、まったくなにかの鳥の歌かと思うようでした。(p.995 1.4)

「イ」という鋭い音を鳥の高く良く通る鳴き声に例えている。ビュフォンによれば鳥がとりわけ鋭い声を発するのは求愛の時期である^(補2)。フェリックスがモルソー夫人へ一方的に求愛しているように見えるが、実は初めからモルソー夫人も声色や仕草で誘惑していたと読める。実際死の間際、モルソー夫人は舞踏会の夜、突然、彼に受けた接吻をずっと忘れられなかったと告白している。鳥の比喩表現によって、その求愛習性へと、読者を取り込み、無意識的に、必然的な隠れた愛のやりとりへと導く。

3) 同じく――

彼女がどうかして笑ったりするとき、それはさながら楽しげな燕の歌声でした。しかしまたそれが自分の悲しみを語るときには、それこそ伴侶を呼ぶ白鳥の声でした。(p.995 1.15)

燕の鳴き声は、高音で「キキキキ」「ケラケラケラ」と笑っているように聞こえ⁽⁸⁾、忙しく楽しげで活気がある。それに対し白鳥の鳴き声は、けだるく不安定で女性が泣いているように聞こえる。この対照的な声を、*hirondelle*「燕」と *cygne*「白鳥」の二羽を使うことでモルソー夫人の気分の浮き沈みを表している。読者を、「燕」と「白鳥」の鳴き声に同化させるだけで、読者を喜怒哀楽のまっただ中へと導く。

4) モルソー伯爵に怒鳴りつけられるモルソー夫人の声の描写では――

嵐（のような怒声）に交じってとぎれとぎれに、雨のやみぎわの鶯の声のように立ち昇る、天使にも似た彼女の声も聞こえてきました。(p.1025 1.15)

モルソー伯爵の怒鳴り声が嵐に例えられ、時々聞こえるモルソー夫人の声は美しい鳴き声で知られる *rossignol*「鶯」に例えられている。鶯の鳴き声は、雨や嵐の轟音にも負けず聞こえてくるかなり高音で澄んだ音である。ビュフォンも、四足動物の鳴き声と鳥の鳴き声を比較し、鳥はその身体が小さい割に四足動物よりもずっと遠くまで声を届けることができると言っている。⁽⁹⁾ ここでは小さくも美しい鶯に例えることで、夫の痲痺に健気に耐え、しかし凜とした

モルソーフ夫人を表現している。読者もまた、小さくも美しい鶯＝モルソーフ夫人に変身し、その状況を生きる。

5) ある夜、夫の暴言に傷つけられたモルソーフ夫人が苦しい胸の内をフェリックスに告白した後の場面では――

狭苦しい部屋に帰る前に、私は星をちりばめた大空の下でのびのびと身を休めながら今もなお、自分のうちに聞こえるあの傷ついた山鳩の鳴き声、あの率直な飾り気のない口調を聞き、あたりの空気の中に一斉に私のほうへ流れているに違いないその女の魂の放射光をかき集めようと思いました。(p.1037 1.40)

この場面は、フェリックスが母親に愛されなかった悲しい幼少時代をモルソーフ夫人に打ち明け、夫人も今の生活の辛さを打ち明け、二人のときだけフェリックスがモルソーフ夫人のことを「アンリエット」と愛称で呼ぶことを許される秘密の夜である。低音で、落ち着いた鳴き声の ramier「山鳩」が使われ、読者は、山鳩＝夜の静けさの中ぼつりぼつりと話すモルソーフ夫人になりきって、その固有のリズムに同化する。

6) モルソーフ伯爵に暴言を吐かれたモルソーフ夫人の描写では――

彼女は激しい苦痛に打ちひしがれました。あたかもこれが初めて受けた痛手でもあるかのように、あたかもこの男が三十年来一度として彼女の心臓に矢を射こむことをやめなかった男であることも忘れたかのように。この心無い鉛弾に、飛んでいるさなか撃ち落とされた気高い鳥とでも言おうか、彼女は一時茫然としてしまいました。(p.1120 1.22)

モルソーフ夫人が予期せず突然傷つけられた様子が、飛行中に撃ち落された鳥に例えられている。読者もまた、そのような鳥になってしまう。

7) モルソーフ伯爵に傷つけられながらもクロシュゲールドの自然に心癒されるモルソーフ夫人の描写では――

自然の風景は彼女の思いを匿うマントでした。彼女も今では夜啼鶯が何を強く望んでいるのかを知り、嘆かわしい調子で聖歌を朗誦しながら沼の歌手たちが繰り返すところの意味も知っていたのです。(p.1105 1.18)

モルソーフ夫人の孤独さが、パートナーを見つけられず夜まで鳴いている rossignol「夜啼鶯」に心情の投影として例えられている。読者もまた、心に合った穴を夜啼鶯でしか埋められない。沼の歌手、カエルの低い鳴き声と夜啼鶯の澄んだ高い鳴き声が夜の静けさの中にコントラストとして効果的に響いている。

8) フェリックスに、自分のことを母親を愛するように愛して欲しいと頼み、フェリックスがそれを承諾したことを喜ぶモルソーフ夫人の描写では――

それまでの三年間にも、かつてこれほど晴れ晴れと幸福そうな彼女の声を聞いたことがありませんでした。この時初めて、前に言った可憐な燕のさえずり、子供のようにあどけない声を私は聞いたのです。(p.1113.1.10)

楽しげで活気のある様子が、またここでも rossignol「燕」に例えられている。読者は、鳥になるからこそ、無邪気に晴れ晴れと幸福そうな声に同化できる。

9) モルソーフ伯爵が病に伏せる間に、まるで夫であるかのようにフェリックスの世話をし、フェリックスに愛のこもった眼差しを投げかけられながら女性としての幸せを感じるモルソーフ夫人の描写では――

あげく、彼女は私に給仕をしてくれながら、それこそはじけるばかりの喜びをその身振りにたたえ、燕の鹿毛色の敏捷さを示し、頬を真っ赤に染め、声を震わせ、山猫のようにじっと食い入るような目つきで見守るのです。(p.1132.1.21)

きびきびと、いかにも早く動く様子が rossignol「燕」に例えられている。せわしなく動かずにはいられないモルソーフ夫人のはやる気持ちに読者も同化する。次に、フェリックスがモルソーフ夫人の中に見出した二つの人格についての例えを、二つ続けてみてみよう。

10) 不幸な夫婦関係に打ちひしがれるモルソーフ夫人の描写では――

モルソーフ夫人は寒いヨーロッパに運ばれてきたベンガル雀――博物学者の手で籠

に飼われて、悲しげに止まり木にとまったままじっと鳴こうともせず死んでいこうとしているベンガル雀でした。(p.1132.138)

11) フェリックスに愛され生き生きと美しさを増したモルソー夫人の描写では――

アンリエットはガンジス河のほとりの住み慣れた林で東方の詩をさえずっている鳥であり、花の咲く鬱蒼とした素馨の花の中を枝から枝へ、さながら生きた宝石のように飛び回っている鳥でした。(p.1132.141)

モルソー夫人の本来持つ明るい性格と、結婚により変化してしまった様子が、同じインドの鳥を使うことでそのコントラストが強調されている。ここではインドという国が暑く、官能と自由を感じさせるエキゾチックなイメージで使われている。本来はそこで生を謳歌していたはずの bengali 「ベンガル雀」が、寒いヨーロッパに連れてこられ環境の変化に馴染めず鳥かごの中で弱る様子を、結婚によって本来の明るい性格が失われていくモルソー夫人の様子に重ねられている。当時、ブルジョワ男性社会は「女性は家庭に」という原理のもと女性に従順さを求めていた。女性は結婚によって、はじめてそのアイデンティティーを確立できるとされていたが、実際はあらゆる規範に身も心も押し込められていた。⁽¹⁰⁾ その在り様を、可憐な鳥で上手く表現しているとともに、秘められた生の匂いをも感じさせている。家庭の中で男性に訓育され、従順で、手の内にあるべき女性を持つ本能の力である。バルザックは、ブルジョワ社会が恐れていた女性の台頭、つまり手の負えない制御不能な存在になることへの不安を予感していたのだろう。このテーマは人間喜劇における動物の比喩表現と深く関わりがあると思われる。⁽¹¹⁾

12) 愛されたいという見返りを求めず、欲に縛られないために裏切られることもない愛の高みを目指すとフェリックスに言う場面では――

私の心は鷲よりももっと高く昇って行きますの。(p.1162.121)

心の崇高さが、高所を飛ぶ aigle 「鷲」に例えられている。ビュフォンも鷲について、嵐のとき、四足動物が雷に打たれ、暗がりにも身を潜めているときでも鷹は、雲の上まで上昇し澄んだ静かな空を楽しむことができるとその優位性を語っている。⁽¹²⁾ 読者も鷲のイメージによって崇高な高みを見上げ想像する。

モルソーフ夫人は計 13 回も鳥に例えられているが、内訳は oiseau 「鳥」 4 回、hirondelle 「燕」 3 回、cygne 「白鳥」 1 回、rossignol 「鷲」 2 回、ramier 「山鳩」 1 回、bengali 「ベンガル雀」 1 回、aigle 「鷲」 1 回となっている。鳥の一般的なイメージに加え種類も多く、個々の鳥の鳴き声や習性の特徴を利用することでモルソーフ夫人の微妙に変化する様子を表現している。これらの鳥の比喩が美しく明るい、そして儂く崇高な女性のイメージを読者に印象付けるのに役立っている。

イギリスの名門貴族で、馬を乗りこなし、フェリックスに自分を愛人にしてほしいと強く迫るダッドレイ夫人の場合は、どのような鳥の比喩表現が使われているのだろうか。

1) ダッドレイ夫人の魅力についての描写では――

イギリス女という金色の糸で家庭の籠に繋がれながら、しかもその餌皿や水鉢も止まり木や餌もすばらしく立派である、そういうものが抵抗し難い魅力を彼女の身に添えるのです。(p.1142.1.10)

oiseau という語はないが encagée 「鳥籠に入れられた」から始まる多くの鳥を連想させる語によって、ダッドレイ夫人を鳥籠で飼われるペットとしての鳥に例えている。

モルソーフ夫人が 13 回も鳥に例えられているのに対しダッドレイ夫人はたった 1 回しか例えられていない。さらに物語としてはモルソーフ夫人のほうが家庭に囚われる籠の鳥であるのに対し、比喩表現のほうでは自分の感情や欲望に率直で、自由を体現したようなダッドレイ夫人のほうが籠の鳥として表現されている。読者は、「すばらしく立派」な地位や身分を保証されているダッドレイ夫人がその安全な鳥かごのなかで、恋愛を楽しんでいるというイメージを持つ。モルソーフ夫人の地位と身分をかけた真剣な愛とは全く違うと自然に

理解される。

フェリックスとモルソーフ夫人の二人についてはどうだろうか。

1) ダッドレイ夫人がフェリックスとモルソーフ夫人を揶揄する場面では――

「あたくし」と彼女は言ったのです。「あのキジバト同士の溜息がどうにも耳障りだわ！」(p.1143.1.22)

フェリックスに激しく思いを寄せるダッドレイ夫人が、フェリックスとモルソーフ夫人の仲を疎ましく思い *tourterelle* 「キジバト」に例えている。つがいで巣を守るキジバトは仲睦まじい夫婦や恋人同士の象徴である。

『谷間の百合』はモルソーフ夫人の貞淑さと潔白な崇高さの物語である。これまでの研究でも夫人の肌の白さやドレスの白さ、モルソーフ伯爵から愛称 *Blanche* 「ブランシュ」(「白い」という意の形容詞) と呼ばれていることなどから、モルソーフ夫人は聖なる存在のイメージとして「神格化」され論じられてきた。しかし、鳥に例えられている数は登場人物の中でも飛びぬけて多い。「俗」なる象徴として描かれたダッドレイ夫人が、ペットとしての鳥に例えられているのに反し、モルソーフ夫人に使われたのはすべて *sauvage* 「野生」の鳥である。一見すると女性の外見的美しさを表現するための比喩表現に思われるが、実はこの鳥の多さが、モルソーフ夫人の隠された生のけだるさや生物的な香りを読者に訴えかける役割を果たしている。モルソーフ夫人に求愛し続け、ダッドレイ夫人の誘惑に負けるフェリックスにせよ女の性を前面に出し、フェリックスを誘うダッドレイ夫人にせよ欲望を表に出してはいるものの鳥の比喩の回数は少ない。語り手であるフェリックスは、最後にモルソーフ夫人からの告白により、ひた隠しにされてきた欲望を知る。フェリックスが、最後まで貞淑に死んでいったモルソーフ夫人にこそ鳥の比喩表現を多用することで、内に秘められた本能、つまり動物的なパワーを読者に感じさせることに成功している。さらに、『谷間の百合』における鳥の比喩表現は、その鳥のイメージによって読者を登場人物に同化させる役割を持っている。読者が同化、没入し物語と一緒に生きる装置として鳥の比喩表現が使われているのである。

2. 『ゴリオ爺さん』における鳥の比喩表現について

これは1834年に完成し、1835年に出版された作品である。人間喜劇の特徴である、一人の登場人物が役者のようにいくつもの作品をまたいで登場する《人物再登場法》をバルザックが思いつき、はじめて適用した作品である。これによりそれ以前より創作の規模も内容も一気に飛躍し、バルザックの成功が人々に確信された。物語は1819年王政復古後のパリである。薄暗く人の寄り付かないパンテオンの裏手にある貧しい下宿屋ヴォケー館と、当時もっとも高級とされた貴族の邸宅街サン＝ジェルマン地区という二つの世界を舞台に物語は展開する。物語の大きな筋は3つ、ゴリオ爺さんの報われない父性愛の物語、青年ラスティニャックが上流階級をめざし出世する物語、そしてヴォケー館に脱走徒刑囚の出自を偽って身をひそめるヴォートランの逮捕劇、である。

主人公は地方の小貴族の息子で家族の期待を背負って上京し、パリで出世をもくろむ野心的な青年ウージェーヌ・ド・ラスティニャックだ。彼の住むヴォケー館は陰気で「パリのどの界隈と言えどもここ以上におぞましく、またあえて言えばここ以上に人に知られていないところはない」^(補3)と語り手が描写する地域にあり、まさにそんなヴォケー館と一心同体のような風貌の女主人ヴォケーをはじめ、7人の下宿人がいる。7人はそれぞれ出自や過去に秘密や謎を持っており、その中でもとくに下宿人たちの噂の的となっているのはゴリオ爺さんと呼ばれる老人である。ゴリオはかつてマカロニなど麺類の製造業で財を成し、羽振りが良く、ヴォケー夫人の求愛まで受けていた。いまや文無しで、家賃の一番安い最上階の部屋を借りている。しかし度々、着飾った身分の高そうな若い女性たちの来訪を受けているので、ゴリオは放蕩爺だの株式取引で失敗した男だの高等警察に雇われたスパイだのと噂される。しかし実際は二人の娘に莫大な持参金を付けて銀行家と伯爵家へ嫁に出した心優しい父親であった。娘のために財産を削り、自分は生活を切り詰め小遣いを渡しているが、娘たちは革命の混乱期に財を成した父を恥じ、自分たちの邸宅に訪ねて来ることを拒否し金に困った時だけヴォケー館にひっそりとやって来ている。ラスティニャックは、親戚のつてを使い上流階級に食い込み、そこでレストー伯爵夫人という貴族の女性に恋をする。それはゴリオ爺さんの娘のうちの一人であった。

ラスティニャックはゴリオの二人の娘レストー夫人とニュッシンゲン夫人を通して、世間体のために父親の苦しみ姿すら厭わない上流階級の冷たさと、身を亡ぼしてまで娘を思うヴォケー館の父親の、両面を知る。脱走徒刑囚ヴォートランは変装し、ヴォケー館に住んでいるが、下宿人のポワレとミショノー嬢によって警察に情報を流され逮捕されてしまう。家賃もきちんと支払い、「いい人」と下宿人に慕われていた彼を売ったミショノーは裏切り者だと下宿人からひんしゆくを買い、追い出される。ゴリオは病に倒れ危篤状態になるが、娘たちは父の最期よりも社交界を選び会いに来ない。ラスティニャックは一人でゴリオを看取りパールラシェーズ墓地に埋葬したあと、このパリを相手に戦ってやると心を決め、晩餐会に出かける、という話である。

さて、『谷間の百合』の登場人物ごとの鳥の比喩表現と、『ゴリオ爺さん』の登場人物ごとの鳥の比喩表現は同じなのだろうか。それとも、異なるのだろうか。いずれの場合でも、それはバルザックの『人間喜劇』の世界において、どのような意味をもつのだろうか。以下、引き続き『ゴリオ爺さん』の登場人物ごとに鳥の比喩表現を分析してみよう。⁽¹³⁾

冒頭、ヴォケー館に暮らす貧しい住人達の描写からただちに鳥の比喩が使われる――

残りの二つの部屋は渡り鳥たち、すなわちゴリオ爺さんやミショノー嬢同様、食費と住居費に月 45 フランしか使えない不運な学生たちに充てられていた。(p.56 1.5)

oiseaux de passage 「渡り鳥たち」という比喩から、金のない学生たちがヴォケー館を拠点にパリの街を飛び回っている様子を想起させる。またゴリオやミショノー嬢が居場所を転々としているとも読め、ますますその出自が謎めいて感じさせる。渡り鳥たちという比喩表現は、『谷間の百合』の登場人物の鳥の比喩表現にはなかった。これはどういうことだろうか。出自の曖昧な登場人物を渡り鳥たちと言い換えると、これからさまざまなドラマが展開されることを読者に予告することになるだろうか。『谷間の百合』の登場人物は、出自が明快であり、鳥の比喩表現も読者の予想を裏切らないが、ここではどうなのだろうか。

ヴォケー館の女主人で、金持ちのゴリオの後妻の座を狙うが失敗しゴリオに冷たく当たるヴォケー夫人の場合はどのような鳥の比喩表現が使われているのだろうか。

1) ヴォケー夫人の顔の描写では――

彼女のぼつてりとした老けた顔、その真ん中からオウムのくちばし型の鼻が突き出ている。(p.54.1.33)

鼻は観相学において人間の内面を知るための重要なパーツである。perroquet「オウム」という読者にもペットとして馴染があり丸く大きくくちばしを持ち、『博物誌』においても言葉を喋る鳥の代表格としてあげられる種を使うことで、ヴォケー夫人の図々しい性格やおしゃべりなイメージを読者に訴えかける。ヴォケーの図々しい詮索によって物語が明らかになっていき、住人達の噂を煽る役割もあることを示している。

2) ゴリオの部屋でゴリオの国債証書を見つけ、彼が金持ちだと確信する場面では――

ヴォケー夫人は、カササギのような目で何枚かの国債証書を見たが、それはざっと見積もっただけでもこの素敵なおゴリオにおよそ 8000 フランから 10000 万フランの年収をもたらすらしかった。(p.64.1.31)

ゴリオがヴォケー館にやってきたとき、荷解きを手伝う際に国債証書を見つけ年収を計算までしてしまうあざとさを *oeil de pie* 「カササギ」に例えている。この鳥は光るものを集める習性があり、それは 1817 年フランスでも大流行を博したロッシェニ作曲のオペラ *La Pie voleuse* 『泥棒カササギ』⁽¹⁴⁾ において物を盗む鳥として扱われたことでも知られる。カササギの習性をヴォケー夫人の性格を表す比喩として用いている。

2) ヴォケー夫人がゴリオを金持ちだと確信し、恋心を抱く描写――

ヴォケー夫人は、亡夫ヴォケーの経帷子を捨ててゴリオ夫人として生まれ変わった

い、という欲望に襲われ、ベーコンをまいて焼かれるヤマウズラのように、その欲望の火にてらてらと焼かれながら床についた。65(11)

ゴリオの妻となることでその財産を自分のものにしようという貪欲さを perdrinx 「ヤマウズラ」に例えている。食用としても馴染のあるこの鳥は一歳未満で肉の柔らかいものを perdreau、一歳以上を perdrinx と呼ぶ。ヴォケー夫人に perdrinx をあてることで匂を過ぎた肉であるにもかかわらず、ベーコンをまき、まだゴリオに魅力をアピールしようとする無理感が読者に印象付けられる。

ヴォケー夫人が鳥に例えられた回数は3回、種類は perroquet 「オウム」、pie 「カササギ」、perdrinx 「ヤマウズラ」と様々だ。これらの鳥が、物語の舞台ヴォケー館の女主人に充てられていることで、この下宿屋で巻き起こる噂、お喋り、盗み見、欲望、といった物語の特徴そのものを具現化しているといえるのではないだろうか。

ヴォケー館の住人で植物園を徘徊する老人にしてその過去は謎だらけで、「社会の不幸や汚濁をのせては黙々と回転してやまぬ車軸」^(補4)のような人物と言われるポワレの場合ほどのような鳥の比喩表現が使われているのだろうか。

1) ポワレの描写では――

ポワレ氏は…七面鳥みたいな首に巻きつけた紐のようにねじれたネクタイとどうもしっくりゆかない汚い白のチョッキやしわくちゃの粗悪なモスリンの胸飾りを人目にさらしながら… (p.58 l.24)

16世紀にすでにアメリカから入ってきていた dindon 「七面鳥」は大きな体の割に細くひょろりと長い首が特徴的である。ポワレの軽薄で何にでも首を突っ込む性格を表しているだろう。のちに住人の一人ヴォートランの正体を詮索し警察に情報を提供する役を担うこととなるのにぴったりの鳥である。

2) 同じく――

ポワレはゴリオに比べれば鷺、紳士なのだ。ポワレはしゃべり、理屈をこね、返事をする。実のところしゃべり、理屈をこね、返事をして、まとまった話は何一つ言いはしなかった。なぜなら、彼には他人が言ったことを別の言葉で繰り返す癖があったからである。(p.75 1.41)

下宿人たちのゴリオに対し浴びせられる野次や飛び交う会話について行けず痴呆のように啞然とするだけのゴリオに比べポワレは aigle 「鷺」と例えられるが、皮肉であり、むしろただ人の言葉を無意味に繰り返すだけで無力でおしゃべりな、perroquet 「オウム」のような鳥が想起される。読者にヴォートラン逮捕劇への付箋を貼っている。

3) ラスティニャックがボーゼアン子爵夫人の夜会で楽しんだ話を聞き、ポワレがヴォケ館の住人ヴォートランと会話する場面では――

「ほんとですな。私だったら王様になるより、あの気苦労のない小鳥になりたいですな。なぜかというと…」と《右に同じ》主義者ポワレが言った。(p.86 1.1)

自由で身軽な立場でありたいというポワレの願望が petit oiseau 「小鳥」によって例えられている。ポワレはヴォートランを警察に売る一人だが、その実行役は実際にはミシヨノ嬢にさせ、ヴォートランの怒りも下宿人の怒りも一身に背負うのはミシヨノ嬢のほうであり、ポワレの「長いものに巻かれる」軽薄な態度があらわされている。

ポワレが鳥に例えられた回数は3回、dindon 「七面鳥」、aigle 「鷺」(の皮肉から想起される perroquet 「オウム」、petit oiseau 「小鳥」)である。ヴォケ館におけるポワレの立場がこれらの鳥からうかがえる。詮索とお喋り、そして自分の考えではなく人に習い決して主犯格にはならない役どころである。ポワレをこの鳥たちとして動き回らせることで物語の展開に拍車をかけている。

ヴォケ館の住人。父親に認知されず、財産分与を拒否され貧しく暮らす若い娘のヴィクトリーヌ・タイユフェール嬢の場合ほどのような鳥の比喩表現が使われているのだろうか。

1) ヴィクトリーヌの描写では――

ヴィクトリーヌは、苦しみの叫びさえなおも愛を表現している傷ついた山鳩の声にも似た優しい言葉を聞かせるのだった。(p.60 1.22)

低音で優しい鳴き声で、「愛」の象徴でもある ramier「山鳩」により父親を慕い続けている健気な娘という印象を与える。さらにこの傷ついた娘を利用して儲けようと、脱走徒刑囚ヴォートランはラスティニャックに言い寄り、読者はヴォートランの犯罪者としての本性を垣間見ることができるのであり、ヴォートランが餌にしようとしているこの山鳩は、同時に語り手がヴォートランに仕掛けた餌として作用している。

ヴォケー館の住人で、過度な父性愛を娘に注ぎ、身を削る優しい老人のゴリオの場合はどのような鳥の比喩表現が使われているのだろうか。

1) ゴリオの髪形についての描写では――

高等理工科学校の理髪師がやって来て毎朝髪粉をふってくれる、鳩の羽根型に分けた彼の髪の毛は、狭い額の上に5つの房をたらし、彼の顔を好ましくかざっていた。(p.65 1.2)

ヴォケー館にやってきた当時、羽振りの良かったゴリオの額から pigeon「鳩」がイメージできる髪型であったことは「愛」がトレードマークであることが分かる。

2) 正麵業で財を成した当時のゴリオの描写では――

忍耐強くて、活動的で、エネルギッシュで、堅実で、なんでもやるのが手早い彼は、鷲の鋭い眼力を備え、すべての先を越し、何もかも予見し、何でも知っていて、そのくせ全てを隠していた。(p.123 1.41)

aigle「鷲」についてビュフォンはその特徴をライオンの勇気と、威厳、高潔さと、気前の良さをもった鳥であると言っている。⁽¹⁵⁾ また高所に住む特徴もあり、商売においては視野が広く能力を発揮していた様子が分かる。現在は

pigeon となりただ娘への愛にひたすら生きるコントラストが示されている。

物語の代表人物ゴリオに例えられた鳥の回数は2回と以外に少ない。Pigeon「鳩」、aigle「鷲」の2種類である。ゴリオは常にヴォケー館におり、行動範囲が狭いことと、ゴリオを取り巻く下宿人たちのほうが噂をするお喋りな鳥たちであり、ゴリオはいつも噂の対象であり、詮索の目なごしを向けられる対象である。それゆえ、鳥の持つ習性はゴリオには当てはまらない、ということであろうか。

ヴォケー館の住人で、上流階級での出世を狙い、ゴリオの娘と付き合ったことでゴリオと親しくなり下宿人の中で唯一真実を知るラストニャック・ド・ヴァンドネスの場合はどのような鳥の比喩表現が使われているのだろうか。

- 1) 出世するには金が要るのだと実感し落ち込んだ後、実家から1500フランが送金されて来ると知り喜ぶ場面では――

ついに、このあいだまで翼もがれていた鳥が、再び両翼を得たわけである。
(p.131 1.16)

出世できない様子を oiseau sans ailes「翼のない鳥」と例えられ、鳥が上昇のイメージから出世のイメージとして使われている。

- 2) 社交界の花形ポーゼアン夫人を自分のものにしたと考えた場面では――

鷲が平野から自分の巣へと、まだ母親の乳房を吸っている白い子ヤギをさらっていくように夫人を自分の心に運び去るために、悪魔の力を持ちたいと願った。(p.154 1.22)

社交界の女王として君臨していたポーゼアン伯爵夫人が恋人に裏切られフェリックスの前で傷心しているのを前に、高所から獲物に狙いを定めタイミングを見計らって一直線に舞い降りる aigle「鷲」になりたいと願う野心の強さを表している。

ラストニャックが鳥に例えられた回数は2回、oiseau sans ailes「翼のない鳥」と aigle「鷲」である。この対照的な二羽の鳥が、ヴォケー館と上流階級社会という対照的な二つの世界を行き来するフェリックスをよく表している。

読者の視線がラストイニヤックの移動する鳥としての視線を通すことで、パリの街を俯瞰する仕組みになっている。

ヴォケー館の住人で、骸骨のような老女にして、出自は謎で娼婦だったのではないと思われるミシヨノー嬢の場合は、どのような鳥の比喩表現が使われているのだろうか。

1) ミシヨノーの描写では――

あのコウモリみたいな女を見ると、いつも寒気がするんですよ、とミシヨノー嬢を指しながらピアンションが小声でヴォートランに言った。(p.91 1.33)

この老嬢は、ヴォケー館の中で唯一鳥とも四足動物ともつかない *chauvesouris* 「コウモリ」に例えられている。彼女こそ、ヴォートランを売った犯人であり、ヴォートランからは「裏切り者」下宿人たちからは「女スパイ」と非難される人物である。ヴォートランの食事に卒中薬を入れ、倒れたヴォートランの服を脱がせ肩ををたたき、囚人のしるしが浮かび上がってくるのを確認し警察を招き入れる。実は警察から相談をうけ、ヴォートランを観察するよう頼まれたとき、ヴォートランに打ち明け逃してやり恩を売ろうかと、つねに損得を考えていた。小説冒頭で下宿人たちが鳥に例えられる中、一人だけコウモリという微妙な生物に例えられていた違和感の理由を読者は終盤に知ることになる。

ヴォケー館の住人で、大悪党、脱走徒刑囚のジャック・コランであり、偽名と変装でヴォケー館に身をひそめているが、ミシヨノーとポワレによって警察に引き渡されてしまうヴォートランの場合は、どのような鳥の比喩表現が使われているのだろうか。

1) ヴォケー夫人がヴォートランに話しかける場面では――

「いったい今日はどんな嬉しいことがあったの？」ヴォケー夫人はヴォートランに言った。「まるで山雀のように陽気じゃないの。」(p.200 1.22)

かなり高音の鳴き声の *pinson* 「山雀」に楽しげな様子が例えられる。

3) ミシヨノー嬢によって盛られた卒中薬のせいで気絶し病気かと疑われた場

面では――

「おや！この人は病気のはずがないよ。若鳥みたいに白いもの。」

「若鳥みたいに？」と、ポワレが繰り返した。(p.214 1.7)

このあと肌に浮かぶ囚人のしるしによって徒刑囚だと分かるのだが、まだここでは誰も彼を疑っていないのであり、poulet「若鶏」の白さという例えが身の潔白さをイメージさせ、下宿人たちを騙していると同時に、真実を知る読者には、その白さが長く服役していたことや夜に生きる犯罪者のイメージを持たせる二重の役割となっている。警察に取り押さえられるときのヴォートランはその動作を「ライオンのよう」^(補5)と例えられ、怒りみなぎる目や表情もまさに肉食獣を思わせるものになる。肉食獣の例えにより、それまで無害な鳥を装っていたことに読者は気づかされる。

銀行家に嫁いだゴリオの娘ニュッシンゲン夫人の場合は、どのような鳥の比喩表現が使われているのだろうか。

1) ニュッシンゲン夫人の描写では――

ラストニャックはニュッシンゲン夫人に恋していた。彼女が彼には、燕のようにしなやかで、華奢に思われるのだった。(p.158 1.41)

2) 同じく――

あの鶯のような声をしたモデルのような身体つきの宝石のような女性を愛せないなんて！(p.161 1.24)

俊敏な動きの hirondelle「燕」と美しい鳴き声の rossignole「鶯」に夫人の美しさを例えている。

分析の結果『ゴリオ爺さん』には計 15 種類もの鳥が登場している。『谷間の百合』が 8 種類であることと比較すると約 2 倍のヴァリエーションだ。この多さは鳥が単に登場人物と読者を同化させるための比喩表現としてだけではなく別の役割があることを意味しているだろう。さらに、鳥の比喩表現は明ら

かにヴォケー館の住人に集中している。これは、ヴォケー館に集中している物語のなぞの多さと比例している。ゴリオが何者であり、なぜ、裕福な生活から一転節約生活になり、見た目も住む部屋も落ちぶれてしまったのか。たびたびお忍びでヴォケー館にやって来る若い女性たちは誰なのか、ヴォートランは何者なのか。これに加え、ヴィクトリーヌのことを父親は認可するのか、社交界から戻ってきたラスティニャックの首尾はいかに、など実に様々な好奇心がこの下宿屋に渦巻いている。そのたびに下宿人たちは盗み見し、聞き耳を立て、噂を流す。ピュフォンが鳥の特性として語る「視力」「聴力」「空間的自由」と重なる。噂のつかみどころのなさや、この19世紀前半の人や金の出や出所の曖昧さを語るのに、鳥はうってつけの装置ではなからうか。『ゴリオ爺さん』における登場人物たちはまさに鳥そのものであり、ヴォケー館は大きな鳥籠のようである。「悪臭のように耐えがたい匂い」⁽¹⁶⁾と例えられるヴォケー館の匂いは、たくさんの鳥たちがひしめき合う鳥籠の匂いと言えるかもしれない。『ゴリオ爺さん』において鳥は語り手以上の観察者であり、物語の真実を読者に見せる役割を負っている。『谷間の百合』では読者の視線は常に語り手とともにあったが、『ゴリオ爺さん』においては、語り手とは分離したもう一つの視線を、鳥が読者に提供しているといえる。ここに視線の重層化が起きており、意味作用の重層化を引き起こしている。

おわりに

人間喜劇の中でも重要な時代に書かれた二作品において、鳥の比喩表現がひととき目立つのはなぜか。考察の結果、この二作品はほぼ同時期の作品であるにもかかわらず、鳥の使用法には『谷間の百合』に見られる視線同化型と『ゴリオ爺さん』に見られる視線分離型の2タイプがあることが分かった。『谷間の百合』では人物のある特定の性質、しぐさ、状況を鳥に例えることで読者を登場人物に同化させている。それに対して『ゴリオ爺さん』では、登場人物たちが鳥の「視力」「聴力」「空間的自由」を持って鳥そのものとして動き回る。つまりは読者を物語空間へ誘い込み、語り手の視線とはちがう、鳥たちによる視線から物語を観察することができる装置となっている。動物の中でも鳥は、昔

からペットとしても馴染があり、肉食獣のように危険で手の負えない存在とは違い小さく飼いならしやすい。しかしまた四足動物よりもずっと高く、ずっと広範囲を移動できる。この特性を使いバルザックは物語に多層の視線を取り入れていると思われる。そうであれば、人間喜劇のあらゆるところに鳥を置くことに意味があるだろう。二作品以降の作品で、どのような役割が鳥に与えられているのか、どのように用いられているのか分析を進めることで、バルザック人間喜劇全体における小説技法のありようを考察することができるだろう。また、他の動物とは異なる鳥の特徴的な鳴き声や、模倣の特徴は、人間喜劇における音楽的物語構成と関係が深いのではないだろうか。物語の中に響く声や音、音楽が物語展開にもたらす効果と鳥の比喩表現にはどのような関わりがあるのかも、今後の検討課題である。

註

- (1) フランツ・ヨーゼフ・ガル (Franz Joseph Gall 1758 年 - 1828 年) ドイツの医師。頭蓋骨の形と人間の内面のつながりとをなえた。『神経系の解剖と生理学一般 (Anatomie et physiologie du système nerveux en général)』は 1818 年に仏訳されバルザックをはじめとした小説家やイラストレーターに影響を与えた。バルザックの骨相学への言及は、『ゴリオ爺さん』はじめ小説全体にちりばめられている。
- (2) ヨハン・カスパー・ラファーター (Johann Caspar Lavater 1741-1801) スイスの神秘主義的観相学者。人間の内面の特徴は外面の肉体や造作の特徴とつながりがある、という論をとる。1775 年から 1778 年にかけてドイツで発表された観相学研究は 1781 年から 1803 年のうちに『人を知らしめ、もって愛さしめるを目的とせる観相術論考 (Essai sur la physiognomonie destiné à faire l'homme et à le faire aimer)』という訳題で仏訳が行われた。さらに 1806 年から 1809 年にはモロー・ド・ラ・サルト博士の編集で図解の多い仏訳が試みられ、『顔によって人を知る法 (L'art de connaître les hommes par la physiognomie)』と題され 1820 年には十巻本の再版がなされたほど人気を博した。
- (3) Honoré de Balzac, *Avant-propos à La Comédie humaine, Œuvre complètes de H. de Balzac*, publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976-1981, vol.12. p.17.

- (4) Ibid., p.18.
- (5) ジョルジュ・ルイ・ルクレール・ド・ピュフォン (Georges-Louis Leclerc de Buffon, 1707-1788) 『一般的・個別的な博物誌 王の収集庫の描写を含む (*Histoire naturelle générale et particulière avec la description du cabinet du roi*)』, 1749-1804.
- (6) Honoré de Balzac, *Théorie de la démarche, La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976-1981, vol.19, pp.210-251.
- (7) Honoré de Balzac, *Le Lys dans la vallée*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976-1981, vol.9 『谷間の百合』における考察は以下すべてプレイヤッド版を使用。各例文の後ろにカッコ付で貢と行を示した。『ゴリオ爺さん』における考察も同様。
- (8) 鳥の鳴き声が聞けるサイト Les chants et les cris des oiseaux de France Cris et Chants des oiseaux-Plus de 100 enregistrements disponibles <http://www.webornitho.com/Chants.chant.cris.des.oiseaux.de.france.et.europe.htm>, 以下、鳥の鳴き声に関する考察は上記のサイトを参考にした。
- (9) Buffon, « discours sur la nature des oiseaux », *Histoire naturelle générale et particulière avec la description du cabinet du roi*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2007, p.1058.
- (10) 小倉孝誠, 『〈女らしさ〉の文化史一性・モード・風俗』, 中公文庫, 2006.
- (11) AZUR14号, 成城大学フランス語フランス文化研究会, 2013年発行に投稿させていただいた論文「動物性と怪物性—バルザック『従妹ベット』に見る登場人物の変容—」のなかで、登場人物にあてられた動物の比喩表現を分析し、動物の比喩から怪物の比喩へと変わる意味について考察した。
- (12) Buffon, *Histoire naturelle générale et particulière avec la description du cabinet du roi*, p.1061.
- (13) Honoré de Balzac, *Le Père Goriot*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976-1981, vol.3.
- (14) ジョアキノー・アントニオ・ロッシーニ (Gioachino Antonio Rossini, 1792-1868), 『泥棒カササギ』はある屋敷で銀のスプーンが無くなり、女中ニネッタが盗んだのだと疑われる。身に覚えがないが証拠もなく、死刑台に送られそうになるが、最後になり光るものを集めい習性のあるカササギが犯人だったとわかり刑を免れる、という物語である。フランスで初演された当時はナポレオン戦争に世間が振り回された後であったこともあり、その疲れからか、真犯人をカササギに設定することによって、一服の清涼感を聴衆に与えたという説もあり、大流行した。
- (15) Buffon, « discours sur la nature des oiseaux », *Histoire naturelle générale et*

particulière avec la description du cabinet du roi, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2007, p.1091. les vautours 「ハゲ鷲」の項の中に aigle 「鷲」との比較がなされている。

(16) Honoré de Balzac, *Le Père Gorio*, p.52.

(補 1) Buffon, « discours sur la nature des oiseaux », *Histoire naturelle générale et particulière avec la description du cabinet du roi*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2007, p.1054.

(補 2) *ibid.*, p.1064.

(補 3) Honoré de Balzac, *Le Père Gorio*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976-1981, vol.3. p.13.

(補 4) *Ibid.*, p.58.

(補 5) *Ibid.*, p.218.